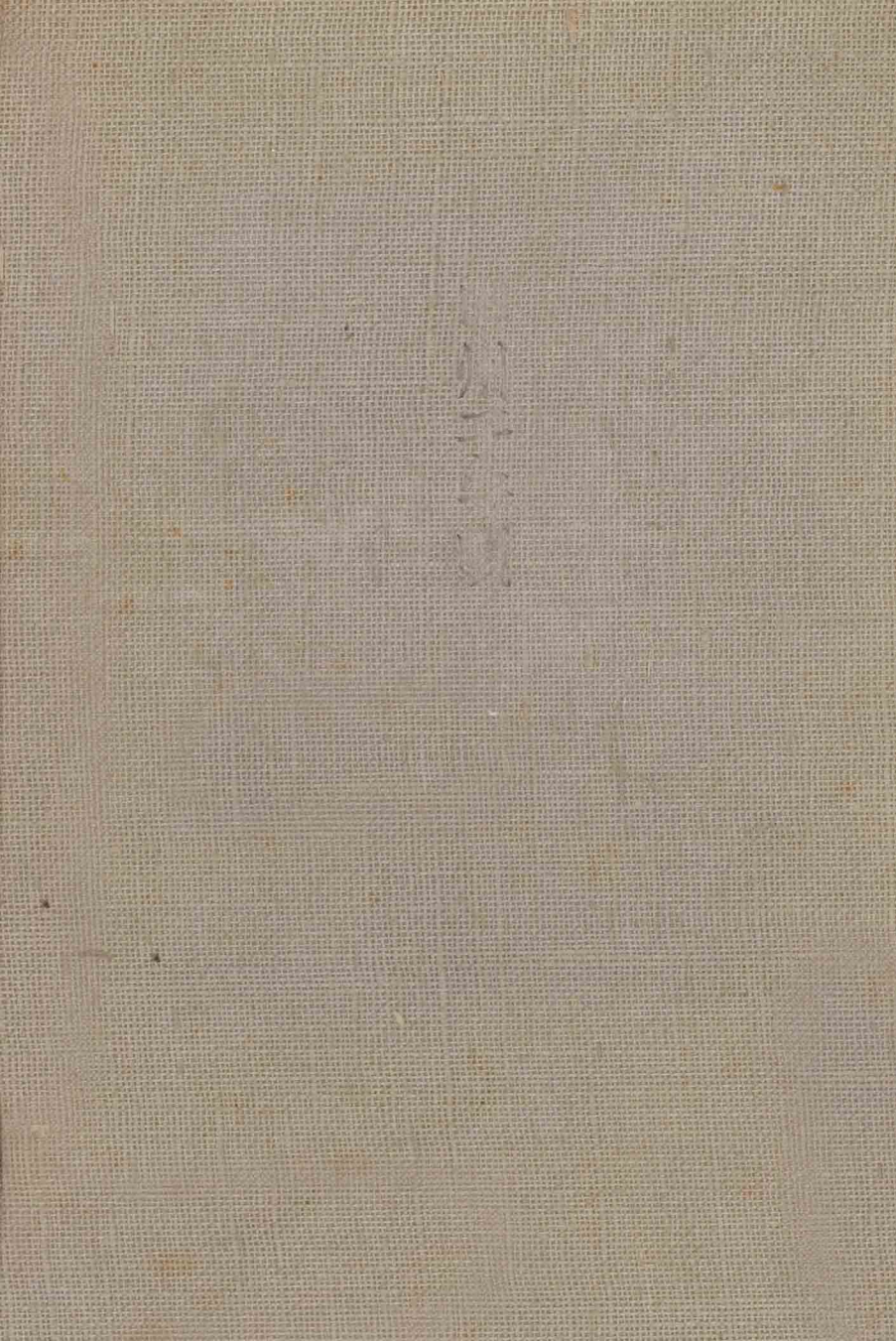




甲州子守唄

深沢七郎

講談社

こうしゅうこもりうた
甲州子守唄

昭和四十年三月十日 第一刷発行

著者 深沢七郎

発行者 野間省一

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽町三ノ一九

振替 東京 三九三〇

電話 東京 (942) 一一一一(大代表)

定価四六〇円

検印廃止

乱丁本・落丁本はおとりかえいたしません

© 深沢七郎 一九六五

甲
州
子
守
唄

装 造
画 本
丹 伊
阿 藤
弥 積
丹
波
子

朝早くから向う側の土手はマユの入っている籠モッコを担いだ人達が通っていた。

(マユを売りに、繭糸市場へ)

と、徳次郎はこっちの土手で眺めていた。すぐ横の、その家の中でも今朝からあの人達を通るのを眺めている母親に、

「えらく、今朝は、繭糸市場へ行くじゃアねえか」

と、徳次郎は怒るようなでかい声で話しかけた。

「お天気がいいから、急いで持って行くら、どこの家でも」

と、母親は家の中のろのろと返事をするのだ。

「帰り^{けえ}は、ゼニ^{せに}を背負^{しよ}って、ホクホクで帰るら、みんな」

母親は他家^{よそ}のマユが通るのを眺めても嫌な気がしないらしいので、徳次郎もちょっと気が軽くなった。

「ああ、持^{けえ}って帰るらよ」

と、徳次郎の言いかたも静かになった。が、

「昨日あたりは値がよかったというから」

とブツブツ言った。いくらマユを売りに行ってもよその家のことなのである。養蚕をしていないからマユが通るのを見てみると、なんとなくとり残されるような気がするのだった。その万年橋はクイの上に板を並べただけのせまい橋だからこち側へ来るには上の鵜飼橋へ行かなければ通れないのである。万年橋は、たまに人が通るだけだし、笛吹の川の流れは黙っている様に静かだった。

「俺家でも、あと20年もたてば」

と家の中で母親おつかあの声がしたが徳次郎は（もう、あのことを）と黙っていた。あの事というのは徳次郎がアメリカへ行く手続をしたことだった。これから許可が下りて、アメリカへ行つて、20年も稼いで帰つて来てからのことを母親は言いだしているのである。

「あと20年もたてば、俺家でもお蚕かいこを飼つたり」

と、また家の中でオカアが言った。そうしてまた、

「川下の、アメリカさんぐれえ」

と言つて、

「川下のアメリカさんじゃア、去年も畑を買つたり、財産は2千円も貯めてるというけんど、そのくれえは大丈夫だぞ、なあ徳次郎、お前まんがアメリカへ行けば」

オカアはあんなことを言っているが（困つたことだ）と、徳次郎はなんとなく心細かった。アメリカへ行つて、身体からだのつづくかぎり稼いで帰つて来るつもりだがそのとおりにいくかどうか決めてしまうことも出来ないのである。病氣びやうきになつてしまうことがあるかもしれ

れないし、それまで母親が生きているかどうかもわからないのである。家の中ではまた、
「帰って来たら、田を買うのは言うにやア及ばんけん、桑畑も、3反ぐれえは買わな
きゃ駄目だぞ、お蚕をするにやア」

と言った。また、

「タンボも、5反ぐれえあればいいぞ」

と言うのである。

「いまから、そんねに、アテにしても」

と徳次郎は自信もないようにブツブツ言いながら川の方を眺めた。万年橋を渡ってこっ
ちへ来るのは妹のギンである。今朝早く、向うの山の方のアメリカさんの家へ様子を聞き
に行つて帰つて来たのだ。

「ギンが帰つて来たよ」

と家の中へ声をかけると、すぐに戸の所へ母親が顔だけ出した。

「アレ、早え、帰つて来たかい」

そう言つたがギンの帰つて来るのが待ちどおしかったようにギシギシと鳴る橋を眺め
た。万年橋は歩けば橋がゆれて板が鳴るのである。

「兄ちゃん、聞いてきたさ、アメリカさんから」

とギンは橋を渡りながらこちへ大声をだした。アメリカさんというのはアメリカへ出
稼ぎに行つて金をためて帰つて来た家のことだった。

「どんなようだった？」

と母親はギンが家へ入る前に外に出て待っていた。

「とても、いいと、まあ、一日でも早く行かなきゃア」

とギンが言った。ギンは様子を聞いて来ると、いつでもこう言うのだった。

「そうずら、早く行った方が勝さ」

と、母親が嬉しそうに言った。徳次郎もホッとした。行けば、(稼いで帰って来ることに間違いない)ときまつたようなものだった。

「許可さえ下りれば、今すぐにだって行きてえけんど」

と徳次郎も気がせいてくるのである。ギンが様子を聞きに行ってくるたびに気がせくのが、向う側の土手は、もうマユを売って帰って行く人達も通っていた。売りに行くときの籠にはマユの白い袋がつまっているが帰りは空の籠を担いで首に風呂敷包を巻きつけているのだ。首に巻きつけた風呂敷の中には売ったマユのゼニが入っているのである。

「どんな仕事をするだど? アメリカへ行つて」

と母親がギンに聞いた。

「そんなこたア、ベツに、言わなんだけんど」

ギンは聞いて来なかったたのである。

「それを聞いて来なきゃア」

とオカアは横を向いてしまった。いつでもギンは一番ききたいことを聞いて来ないのである。アメリカへ行く手続を県庁へ出したのは去年の暮で、半年もたつがまだ県庁からは何の通知もないのだった。が、いつ、突然に許可が下りるかも判らないのである。

「また聞かなんだのかい」

とオカアが言った。

「聞いたけれど、ベツに、なんとも言わなんださ、なんでも、20年ぐれえ、辛棒しなきゃだめだと教えてくれたけれど」

とギンは言いわけのように言った。

「お前が、自分で行って来なけりやダメさ、本人の、お前が行かんという法はねえさ」とオカアは文句のように言うのである。

「それだから俺が行くと言うのにいつでもギンが行ってしもうだよ」

と徳次郎もあわてて言った。徳次郎が行こうとすると（わしが行ってくる）とギンが行ってしまふのだった。

「もう一遍行ってくるさ、なんべんでも行って、よく様子をきいてくるのに越したことはねえ」

と、母親は文句を言ったが、

「そのヒトは何年ぐれえアメリカへ行ったずら？」

と、ひとりごとのように言った。

「20年も行って来ただと」

と、ギンが早口に言った。

「やっぱり、20年は行って来なきゃ駄目というわけさ」

と、母親が言った。

「そういうことだ」

と、徳次郎も相槌を打った。家の横で、ガサガサと音がして、誰かが通っているらしい。

「アレ？」

と母親が言うので徳次郎は川の方を見るとマユの入った袋の籠をかついでふらふらと万年橋を渡ろうとしているヒトがあるのだ。

「あんなところを、かついで渡るすらか？」

と母親が目をすえて眺めていた。

「あれ、無理をするジャン」

とギンが笑いながら言った。歩いて渡るだけのせまい橋を重い荷を担いで行くので橋がぐらぐらゆれるのである。

「アレッ？」

と、こんどは徳次郎が声をたてた。橋のまん中で止って籠からマユを入れた白袋を持ち上げているのである。

「なにをするすらか？」

と、ギンも言った。橋の上ではマユの袋の口をほどいているらしい。

「あっ」

と徳次郎が叫んで立ち上った。橋の上では袋の口を川に向けて持ち上げて、マユをこぼしているのである。

「あれあれ」

「どうしたずら？」

と、母親やギンがびっくりしているうちに橋の上のヒトは次のマユの袋の口も開けて川へこぼしているのだった。徳次郎はハダシで飛び出して川の中へ入って行った。水の深さは腰までではないが泳ぐようにマユの流れで行く方へ近づいて行った。白いマユが水の流れにいつぱい浮んで流されている。徳次郎は手で掴もうとしたが2ツか3ツしか掴めないものである。(とても、ダメだ)と諦めて橋の上を眺めた。橋の上ではどんだん袋からマユを川へ流しているのだった。

「どうしたでえ？ おじさん」

と川の中に立って徳次郎は声をかけた。橋の上のヒトは黙っていた。徳次郎は流れているマユのなかを橋の方へ近づいて行った。

「どうしたでえ？」

と、また声をかけたが橋のヒトは禿げあがった広い額に青すじが脹れあがったように筋ばっていて、こつちを見もしないし、呼びかけても聞こえないようである。真ッ青な顔を流れて行くマユを眺めているだけである。徳次郎はまた川の中を歩いて家の方へ帰ってきた。

「あのヒトは、氣狂えずらよ」

と言った。

「なんぼ氣狂えでも、もってえねえことを」

と、ギンが言った。

「マユを、川へ流してしまふとは」

と、徳次郎もギンも、よそのヒトのことだが、怖ろしくなつて、ふるえていた。

夕方、向う側から橋を渡つて来る40歳ぐらいのオバさんがあった。橋のまん中に立つて、川を眺めていた。長い間眺めていたがこつちへ渡つて来て徳次郎の家へ声をかけた。

「今日、マユを川へ流したけど、ダメずらねー」

と言われたが徳次郎は黙っていた。

「あんたのうちのヒトでございすけ、川へマユを流したのは」

と母親おつかあが言った。

「そうでございす、マユの値が安すぎたから、うちのお父うさんが、怒りだして、うちのお父うさんは短気だから、＼そんなん安いじゃア、捨ぶちやつた方がいい」と言つて、売らなんで川へ流してしまつて」

と言うのである。母親が、

「あれ、マユの値は安かつたでございすか？」

と聞いた。

「安くて、安くて、話にやなりやせん」

と、オバさんは言うのである。

「そんなこたアねえら、昨日あたりは値が上つたと聞いたけど」

と、徳次郎が口をとがらせて聞いた。

「昨日、値が上ったというけれど、それまえから値が下っていたから、上ったと言っても、これ以上さがればタダみてえでございすよ、今日なんか」

と、オバさんは言うのだった。

「今日はいくらでございした？ 安いと言つても」

と母親が聞いた。

「今日なんか話しになりやせん、なんぼ私家のマユが悪いマユだからと言つても1貫め、60銭だということぞございす、うちのお父うさんが怒つて、売らなで、ヤケを起して川へ捨つたげんど」

そう言つてオバさんは涙声になった。

「いくら安くても川へ流したじゃア、みんな損じゃございせんか」

と母親が言つた。

「川へ流しちまえば1銭にもならんということだ」

と、徳次郎が言つた。

「きのう、1円20銭だと言つてたげんど」

とギンが言つた。

「そんなことを聞いたから、うちでも今朝早く売りに来たのでございす」

と、オバさんの泣き声は止んでいた。が、

「1円20銭なんちゅうマユは、うんというマユでございしょう、私家のマユは悪いマユだったでございしょう」

と、言う声はふるえている。

「どのくれえでございました、川へ流したのは？」

と母親が聞いた。

「20貫もでございました」

とオバさんの泣き声は止んでいた。

「20貫かア、それじゃア、12円もだ、えらいことだ」

と徳次郎が言った。

「30円くれえになると思つて売りに来たけんど」

と、オバさんは言った。

「川へ流しちゃア、タダと同じこんさ」

と、ギンが笑うように言った。

「川へ流したじゃア、桑代も、1銭にもならんというこんだ」

と、徳次郎も笑うように言った。

「桑代どころか、お蚕の種紙代も丸ずりでございす、種代が3円50銭かかりやした、夜中、よじゅう寝る目も寝なんで、桑をやつて、火をたいて蚕室を暖かくして」

そう言つてオバさんはわーっと泣きだした。

「仕方がねえさ、川へ流しちゃつたものを、どうすることも出来んだから」

そう言つて、こんどは母親が泣きだした。オバさんが泣いているのでオカアも泣きだしたのだった。

「首をくくつても、流したものが帰^けつて来るわけはねえだから」

と、ギンも泣き声で言った。

「仕方がねえさ、病氣でもしたと思って、あきらめるでごいすねえ、オジさんが、口惜しくて川へ流すのも無理もねえこんさ、病んだと思って我慢して、まあ、仕方がねえさ」

と母親は子供を宥めるように言った。

「そうさ、そうさ」

と、徳次郎が言った。

「そうさ、そうさ」

とギンが唄うように言った。

「わしもそう思っていやアす」

とオバさんも言った。母親はお茶を入れてやってオバさんはかなり長いあいだ話してから帰って行った。ギシギシ橋が鳴って、オバさんが渡って行くのを眺めながら母親は徳次郎の足をつついた。

「アメリカから帰って来ても、桑畑なんか買わなんでもいいぞ、ゼニにしておいた方がいいぞ」

と言った。

「そうさ、そうさ、無理に桑畑を買う必要はねえさ」

と徳次郎も相槌を打った。

「兄ちゃん、マユなんか、だんだん安くなるぞ、ゼニにしておくことさよオ」

とギンも言った。

「そうさ、そうさ」

と、徳次郎はまた相槌を打った。

「ゼニにしておくことだ、いいか、ゼニにしておくことに間違えはねえ、そりゃア、田んぼや畑も少しは要るけど、ゼニにしておくことに間違えはねえ」

と母親がちからを入れてまた言った。

「そういうことだ」

と徳次郎は言つて、アメリカから大金を持って帰つて来る時のことを想像していた。

次の日、鵜飼橋の上の笛吹橋の川かみの小松のおばさんが様子を知らせに来てくれた。

小松へ嫁に行ったオカアの妹でオカアが頼んだのではないがずっと川かみのアメリカさんの家へ行つて様子を聞いてきたのだった。

「いいさ、いいさ、アメリカへ行けば」

と言いながら家の中へ入つて来た。そんなことをきくたびに徳次郎はアメリカへ行けば金を持つて帰れることに（間違ひはないぞ）と安心した。

「どのくれえゼニを持つて帰つて来るものずら？」

と母親おかあが聞いた。

「さあ、どのくれえ持つて来たかそんなことア教えてくれんけど、家の中の様子を見ればわかるさ」

そう言いながら小松のおばさんは、